

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520754

研究課題名(和文) 小学校教員養成課程における外国語活動に対応した教員のピリーフ形成プログラム開発

研究課題名(英文) Program Development of Teachers' Belief Formation Adapted for Foreign Language Activities in the Elementary School Teachers' Training Course

研究代表者

井狩 幸男 (Ikari, Yukio)

大阪市立大学・文学研究科・教授

研究者番号：60193158

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：研究代表者と分担者は、平成23年と24年に現職の小学校教員と英語教職課程の学部生をそれぞれ対象にアンケート調査を実施し、ピリーフ形成のためのプログラム開発の議論を重ねてきた、さらに、平成24年には、外国語教育メディア学会全国大会で、経過報告と今後の展望を発表し、平成25年には、米国ダラスで開催されたTESOLにて、本科研関連のポスター発表を行った。最終年度には、より具体的なプログラム案について話し合った。その結果、授業観察、授業体験、教育実習を段階的に進める中で、自らの指導方法を模索することがピリーフ形成に繋がるという結論に達し、英語教員のピリーフ形成に必要なプログラム最終案に反映させた。

研究成果の概要(英文)：We analyzed the data collected from the questionnaires administered in 2011 and 2012, developing a program for the teachers' belief formation adapted for the training course of future elementary school teachers. We've discussed the program so far, improving and sophisticating it by making public a tentative and temporary plan in the form of the symposium in the National LET Conference 2012 and the poster session in TESOL International Convention 2013. Finally, we've established the plan of the program in which our thoughts and ideas are reflected. That is, teachers' belief should be realized throughout the gradual process of their classroom observation, classroom participation, teacher training and subsequent grasp of significance of teaching.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：ピリーフ 外国語活動 早期英語教育 小学校教員 教員養成課程 教員研修

1. 研究開始当初の背景

研究代表者と分担者は、小学校教員養成課程があり、外国語活動を意識したカリキュラムを提供していない私立大学に通う157名の大学生を対象として、2007年、2009年、並びに2010年に、質問票による調査を実施した。その結果、2007年と2009年の調査で、小学校で英語を教えることに賛成する一方で、外国語活動を行うことに対する不安が、回答者の間で共通して認められた。また、2010年の調査では、2011年の小学校の外国語活動完全実施を前に、実際に教えることに対する不安に加え、新たなトレーニングを必要としていることが明らかになった。さらに、この縦断的調査と並行して2010年に行った外国語活動対策に積極的に取り組んでいる教員養成系の大学との比較調査から、両大学の学生間で外国語活動の取り組みに対する意識が異なることがわかった。外国語活動に対応したカリキュラムを用意している小学校教員養成大学では、教えることに対する学生の不安は、それほど強くないという結果が得られた。

ところで、従来のピリーフ研究では、教員のピリーフは、経験を積むことにより成熟すると考えられていた。しかし、その後Liaoの研究により、教員養成期に形成されたピリーフは、そのまま維持される可能性が示されるようになった。この流れを踏まえながら、上述の本科研開始前の縦断的調査、並びに横断的調査の分析結果を勘案することにより、教員養成課程において、外国語活動を考慮した教員のピリーフ形成のためのプログラム開発の必要性が支持される。

2. 研究の目的

本研究では、2008年度から小学校の外国語活動を意識した教員養成課程が、さまざまな大学で始まっていること、並びに、2011年度に公立小学校において外国語活動が完全に実施されることを勘案し、小学校教員養成課程において、カリキュラムが異なる大学間でも共有でき、外国語活動に対応した教員のピリーフ形成プログラムを提案することを目的とする。

また、2011年度より全ての公立小学校で実施される外国語活動において、どのように教えるかという方法論が先行し、何の為に教えるのかという目的論が後回しになる傾向を踏まえ、小学校教員養成課程における外国語活動に対応した教員のピリーフ形成プログラムを通して、外国語活動に対する問題意識を培い、明確な目的意識を持ち、外国語活動をより適切に行う教員の育成を目指す。

3. 研究の方法

(1)2011年度

これまでに実施した教員のピリーフに関する調査データについて分析・考察し、教員のピリーフ形成のためのプログラムの骨子

について検討した。具体的には、これまでに収集したピリーフに関する調査データの分析を踏まえ、ピリーフ形成のためのプログラム作成の基礎となるコースデザインについて、高橋と福原が、6月と7月に学会で発表を行った。また、外国語活動を指導する教員のピリーフに関するアンケートの調査項目を、本科研のメンバー全員で検討した後、吉田が8月に現職教員144名を対象としたアンケートを実施し、回収したアンケートについて、全員で約一月かけて分析を行った。以上の活動を基に、今後の研究の進め方について本科研のメンバーの間で共通理解を得る為に、2012年1月8日に会合をもち、教員のピリーフ形成のためのプログラム作成に向けて、関連する問題を議論した。

(2)2012年度

英語教職課程の履修学生を対象にピリーフに関する調査アンケートを実施し、データの収集と分析を行った。同時に、2011年度に現職の教員を対象に実施したピリーフに関する調査アンケートのデータ分析結果、及びBenesseや英検の最新の調査を踏まえ、2012年8月に甲南大学で開催された外国語教育メディア学会全国研究大会公開シンポジウムに科研メンバー全員で臨んだ。そこで、外国語活動が抱える課題を明らかにし、小中連携はどこまで可能か、指導者(担任、ALT、専科)はどのような役割を担うべきか、教科化は必要なのかなどについて活発な議論を行うことにより、ピリーフ原案作成に繋ぐことを目指した。さらに、実施したアンケート調査の分析を基に、小学校教員養成課程における外国語活動に対応した教員のピリーフ形成プログラム開発が、海外でどの程度通用するのか確認する為、2013年3月に米国のダラスで開催されたTESOL国際大会に科研メンバー全員で参加し、ポスターセッションによる研究発表を行った。

(3)2013年度

2013年9月30日に開いた全体会議において、それまでに集めたデータの分析を踏まえ、具体的にどのようなプログラムが開発可能か話し合った。その結果、授業観察、授業体験、教育実習を段階的に経験する過程で、自らの指導方法を模索することがピリーフ形成に繋がるという結論に達し、小学校外国語活動に関わる英語教員のピリーフ形成に必要なプログラムの骨子として、最終案に盛り込むことになった。

また、2013年10月26日には、加賀田、河内山、吉田の3名がAsia TEFLで、前年度に実施した英語教職課程の履修学生を対象としたピリーフに関する調査アンケートの分析結果について発表を行った。

(4)その他

上述の実施アンケートについて、補足する。
実施方法

質問紙は、性別、経験年数、担当している学年(高・中・低)を記してもらい、続いて2008

年から使用している教員養成者用質問紙の中から抽出した項目について回答してもらった。これらの項目は、4つのカテゴリー(外国語活動に関する意識 12 項目、児童が身につけるべき能力・資質・態度・指導者 14 項目、チームティーチングをするうえでの学級担任の役割 5 項目、望ましい指導形態 4 項目)に分けられている。4つのカテゴリーに属する質問項目に対しては、1(まったくそう思わない)から、4(強くそう思う)までのリッカート 4 段階回答方式を用いた。

分析方法

全ての質問紙の回答をコード化し、次の 2 点に関して分析を行った。

(1) 外国語活動担当教諭の性別・経験年数・担当している学年に関する記述分析

(2) 4つのカテゴリー(外国語活動に関する意識、児童が身につけるべき能力・資質・態度、チームティーチングをするうえでの学級担任の役割、望ましい指導形態)に関する記述分析

4. 研究成果

2011 年に現職の小学校教員 144 名を対象に行ったアンケート調査の分析結果から、「指導力を向上させることが必要」、「コミュニケーションの楽しさを体験させることが大切」、「児童の興味関心を考慮しながら、授業参加を促進することが大切」と感じている教員が多く見られた。これらは、英検調査や Benessee 調査にも共通して見られるものである。さらに、今回実施したアンケート調査で顕著に見られた特徴として、外国語活動の担当者には女性が多いこと、10 年未満の経験年数の教員がほとんどであったこと、また、望ましい指導形態に関しては、学級担任+ALT > 学級担任+専任教員 > 専任教員 > 学級担任、の順で、学級担任と ALT とのチームティーチングを強く望んでいることが明らかになった。

また、2012 年に英語教職課程の履修学生 733 人を対象に実施したアンケート調査では、「自分の英語力に自信がない」、「ネイティブ英語講師との意思疎通が苦手」という側面が明らかになった。この傾向は、学生の英語力と相関があり、英語力の高い学生ほど、不安が少なかった。

現職の小学校教員、並びに、英語教職課程に在籍する学部生へのアンケートの分析結果を踏まえ、2013 年 9 月 30 日に開催した科研メンバーの全体会議での考察・検討を基に、小学校外国語活動に関わる英語教員のピリフ形成に必要なプログラムの骨子を、次のようにまとめた。

(1) 大学 1 年

複数の小学校訪問
発達心理学
ネイティブ英語講師授業

(2) 大学 2 年

授業参観
心理言語学
ネイティブ英語講師授業

(3) 大学 3 年

教育実習
神経言語学
教室内使用英語訓練

(4) 大学 4 年

教育実習
応用言語学
グローバル英語授業

(1) 大学 1 年

複数の小学校を訪問し外国語活動の実態を把握することから始める。同時に、発達心理学を通して、ことばの発達の基礎となる心の発達について学ぶ。また、ネイティブとの英語のやり取りを通して、苦手意識を克服すると共に、英語で表現する能力を培う。

(2) 大学 2 年

一つの小学校で、授業参観をさせてもらいながら、3 年次の教育実習に向けた心の準備とより具体的な様々な始動に向けた準備を行う。同時に、心理言語学を通して、ことばの発達と心の発達の関係について学ぶ。また、ネイティブとの英語のやり取りを通して、教室でも使えるコミュニケーション能力の向上を図る。

(3) 大学 3 年

教育実習を通して、様々な自分の能力について、できるだけ客観的に眺めるようにする。同時に、神経言語学を通して、脳科学の観点から、どういう指導法が適切であるかを考える。また、小学校の教室で使える英語表現を自然に使えるように訓練する。

(4) 大学 4 年

前年の教育実習の経験を踏まえ、より良い指導法を模索する。これまでに学んだ発達心理学、心理言語学、神経言語学を踏まえ、総仕上げとして、応用言語学について学ぶ。同時に、グローバルな視点から英語を学ぶことにより、World Englishes の視点をもつ。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

泉恵美子、小学校英語における評価のあり方 - 自己効力感と自律の育成を目指して -、教育実践研究紀要、査読有、14 巻、2014、69-78

泉恵美子、萬谷隆一、アレン玉井光江、長沼君主、田縁真弓、大田亜紀、島崎貴代、森本敦子、小学校外国語活動における評価のあ

り方 - 児童の学びの支援に関する研究 - 、JES Journal、査読有、14 巻、2014、228-243
福原史子、高橋幸子、外国語活動を指導できる小学校教員の養成 教師としてのピリフ形成の視点から、ノートルダム清心女子大学紀要 人間生活学・児童学・食品栄養学編、査読有、37 巻 1 号、2013、59-75
萬谷隆一、泉恵美子、他 4 名、外国語活動の評価方法に関する研究 - 自己評価を中心に - 、小学校英語教育学会誌、小学校英語教育学会誌、査読有、12 巻、2011、147-154
生馬裕子、吉田晴世、他 2 名、ICT を活用した小学校英語活動における知覚学習の効果の検討 - 英語の文字・音韻 - シラブルの知覚学習に焦点を当てて - 、CIEC 研究会論文誌、査読有、2 巻、2011、33-38
加賀田哲也、小学校英語活動の「文化理解」に関する指導、日本国際理解教育、査読有、17 巻、2011、4-12

〔学会発表〕(計 7 件)

加賀田哲也、河内山真理、吉田晴世、Elementary School English Teacher Training Development in a Changing Japan、The 11th Asia TEFL International Conference、2013 年 10 月 26 日、Ateneo de Manila University、Manila、Phillipines

有本純、河内山真理、現職教員の英語発音に関するパイロットスタディ：発音力強化に必要な要素の分析、第 39 回全国英語教育学会北海道研究大会、2013 年 08 月 10 日、北星学園大学

泉恵美子、萬谷隆一、アレン玉井光江、長沼君主、田縁真弓、大田亜紀、島崎貴代、森本敦子、小学校外国語活動における評価のあり方 - 児童の学びの支援に関する研究 - 、小学校英語教育学会、2013 年 07 月 14 日、琉球大学

井狩幸男、吉田晴世、高橋幸子、福原史子、泉恵美子、河内山真理、Teacher Beliefs about Elementary School English Teaching in Japan、TESOL 2013 International Convention & English Language Expo、2013 年 03 月 23 日、Dallas Convention Center、USA

井狩幸男、吉田晴世、高橋幸子、福原史子、泉恵美子、河内山真理、加賀田哲也、外国語活動に関する意識調査から見えてくること 大手民間教育機関による調査結果を踏まえて、外国語教育メディア学会 (LET) 第 52 回全国研究大会、2012 年 08 月 09 日、甲南大学

福原史子、高橋幸子、教師としての確固たるピリフの構築を図るコースデザイン、小学校英語教育学会第 11 回大会、2011 年 7 月 17 日、大阪教育大学

福原史子、高橋幸子、教師としてのピリフの構築 - 学級担任が外国語活動を指導するために - 、第 42 回中国地区英語教育学会、招待講演、2011 年 6 月 25 日、岡山大学

〔図書〕(計 5 件)

吉田晴世、野澤和典、丸善プラネット、最新 ICT を活用した私の外国語授業、2014、227
樋口忠彦・加賀田哲也・泉恵美子・衣笠知子、研究社、小学校英語教育入門、2013、206

岡秀夫、金森強、井狩幸男、泉恵美子 他、成美堂、小学校外国語活動の進め方 - 「ことばの教育」として - 、2012、302

樋口忠彦、泉恵美子、並松善秋、加賀田哲也 他、教育出版、英語授業改善への提言、2012、292

高橋美由紀、柳義和、泉恵美子、吉田晴世 他、協同出版、新しい小学校英語科教育法、2011、269

〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況 (計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井狩 幸男 (IKARI, Yukio)

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：6 0 1 8 3 1 5 8

(2) 研究分担者

高橋 幸子 (TAKAHASHI, Sachiko)

ノートルダム清心女子大学・文学部・教授

研究者番号：5 0 1 9 9 2 4 4

吉田 晴世 (YOSHIDA, Haruyo)

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：4 0 2 1 0 7 1 0

河内山 真理 (KOCHIYAMA, Mari)

関西国際大学・教育学部・准教授

研究者番号：5 0 2 9 0 4 2 4

泉 恵美子 (IZUMI, Emiko)
京都教育大学・教育学部・教授
研究者番号：10388382

福原 史子 (FUKUHARA, Fumiko)
ノートルダム清心女子大学・人間生活学
部・准教授
研究者番号：70545988

加賀田 哲也 (KAGATA, Tetsuya)
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：40278578